

※ 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。問いに字数の指定がある場合は句読点や記号も一字に数えて解答すること。

1 次の文章を読んで、①～⑤に答えなさい。

新しいことばが、若い人びとの間で流行したとき、親や年輩の人びとはそのことばが通じないと、軽いショックを受けます。ただ世代のギャップを感じたというだけでなく、ことばが通じなくなるかもしれないという恐怖があるからで、時代の違いを感じとってしまうからです。なぜなら、ことばが通じることこそ、現在という共通の時代を生きている同時代人のあかしだからです。ですから、明治維新が日本の現在ののはじまりであるということはこの点ではむしろかしいでしょう。中江兆民の『三酔人経綸問答』は、現代日本語に訳されなければならなくなっているからです。こうして翻訳しなくても理解しうる生活の範囲が現在だということもできるのです。

ところがよく考えてみますと、私たちが日常生活を送るなかでなにげなくしている行為や行事が、現在だけのものであると必ずしもいいきれないのです。たとえば道で煙草をすおうとしてマッチがないとき、通りすがりの人に「すみませんが火を貸してくださいませんか」といえば、たいてい気軽に貸してくれるでしょうし、マッチで煙草に火をつけてくれたあとで、「ではいつ返してくださいますか」と聞く人はまずいでしょう。ところが、電話をかけようとして十円玉がないとき、通りすがりの人に借りるとしても、返す約束をしなれば借りられないのです。

ではなぜ火ならよいのでしょうか。いろいろな考え方がありますが、石器時代に人間が火を聖なる共有物とみなしていたことが、私たちの意識の奥深くでいまも生きていて、火を貸すことは人間としての当然の義務だと考えているのかもしれないのです。

このように考えてみますと、私たちは現在に生きていながら、私たちの振る舞いや使っていることばその他のなかに、数えきれないほどの過去がしのびこんでいることに気付くのです。ことばはいまでもなく過去から私たちに贈られたものですから、ことば本来の意味を探ってゆくと、遠く古代にまでさかのぼることははじょうに多いのに、私たちはそのことに気付かずに使っているのです。

② キュウレキのお盆のころになると、数百万人にのぼる日本人が故郷へ帰ります。一応墓参りをするためとなっています。墓参りとは死者と会い、死者と交流することでもあります。現在都会で忙しく暮らしている人は、人間は死ぬば無にかえてしまおうと、リクツでは考えているかもしれませんが、現実にはそのように考える人でもお盆に里帰りをするとき、死者と出会う機会を自らつくっているのです。

私たちの意識の奥底に過去がしのびこんでいるのです。年中行事のひとつの正月も同じです。誕生日を祝うということも過去の再現にほかならないでしょう。毎年誕生日がめぐってくるとき、人びとは今日この日に自分が生まれたのだといえます。③ チュウショウウ的な数の流れとして年月を考えればそんなことはありえないことなのですが、日本人の意識の中では三百六十五日が単位となつて、一年たつてふたたびまた新しい一年がくり返すという考え方があるので、このように考えるのでしよう。

私が幼いころ家に一冊の書物がありました。それは上段が絵で下段に説明があり、一年間の一日一日が歴史のなかでどのような日であったかを説明した書物でした。その『日本国史絵物語』はこのような考え方をたまたま日本史全体にひろげて、今日は歴史上のなんの日かを示そうとした書物でした。今日は私の誕生日ですということはだれでもいえます。正確には誕生日から何年目かなのです。

しかし、日本史のなかで今日が何々の事件があった日だということには重要な問題があります。なぜなら過去数千年の歴史のなかで、数千以上の数えきれないほどの出来事がこの日に起こっているのですから、そのなかからなぜこの事件だけを今日起こったこととして回想するのかという問題があるからです。神社の祭礼に私たちもしばしば出かけます。あれは現在の出来事ですが、じつは過去に起こった事件を想起し、現在の出来事のなかに組みこもうとする試

みなのです。いわば過去を現在にするための行事です。お神輿をかついでわっしよいわっしよいとかけ声をかけたり、縁日で玩具やワタ菓子を買った記憶はだれにでもあるでしょう。

しかしあの祭礼が過去を現在にひきもどすための行事なのだということはあまり意識されていないように思えるのです。創立記念日となるともつとはつきりしています。過去に起こった事件を思い起こし、それを現在のものと意識しようとするところから創立記念日が生まれるのです。

ヨーロッパでもまったく同様です。たとえばキリスト教のミサとは、イエスの一生を、とくに十字架上の死を中心として再現し、パンはイエスの肉となり、ブドウ酒は血となると理解され、イエスの死と復活を現在に再現しようとする儀式です。いわばミサそのものが現在化された過去なのです。

このように考えてみると、現在と過去とははっきりと区別することがむずかしくなります。いわば現在は過去によって規定され、現在の足もとには過去が流れこんでいるからです。

しかしながら、現在を規定しているものは過去だけではないのです。未来もまた現在を規定しています。将来の計画をたてて現在の生活を営む人、受験勉強のために遊びをひかえ塾通いをする人、あるいはもつと大きな計画の準備をするために今日の生活をおくる人たちは、未来によって現在を規定しているのです。

(出典 阿部謹也「自分のなかに歴史をよむ」)



① ———の部分の②④を漢字に直して楷書で書きなさい。

② 「若い」の「若」の字を行書で書くとき、

一画目はどこになりますか。下の中から選び、記号で答えなさい。

③ 「若いショックを受けます」とありますが、「親や年輩の人びと」が

ショックを受けるのはなぜですか。その理由を説明した次の文の□に入るのに適当なことばを、□1は文章中から十字以内で抜き出し、□2は文章中のことばを使って三十五字以内で答えなさい。

ことばが通じることばは□1□2なので、新しいことばが理解できないと、□から。

④ 筆者が考える「行事」の意義とはどのようなものですか。解答欄の形式に従って、文章中から三十五字以内で抜き出して答えなさい。

⑤ 本文について説明したものととして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア 筆者は過去と現在の関係について例をあげ、私たちの現在の生き方が狭められていると結論づけている。

イ 筆者は行事や記念日など身近な例をあげながら、伝統が失われていくことを問題視している。

ウ 筆者はヨーロッパの例をあげ、日本人の時間やものについての考え方が西洋化しつつあると述べている。

エ 筆者は具体例をあげながら、現在の行為やことばの奥に過去の歴史や生活が存在していることを明らかにしている。

次の文章は、幼い「あい」が母親の使いで自分が紡いだ糸を渡しに、伯母である「年子」の家を訪れた場面である。これを読んで、①～⑥に答えなさい。(四枚のうち二枚め)

年子に送られて庭を横切っていたら、製錦堂から書を読み上げる声が重なって響いてきた。立ち止まって覗き見れば、子弟の間を難しい表情で歩いて回る俊輔の姿がある。姿勢の悪い者を見つけると手にした木の尺で容赦なく叩き、音読の音が小さいと「曾子いわく、吾、日に」と大声で手本を示した。

読み上げる書の内容がよくわからずに、あいは、小首を傾げる。

俊輔伯父には敵わぬまでも、父左衛門もひとから頼まれて代書などをする。だが、君塚へ嫁いできた母のコトは読み書きができない。姉妹は農作業の合間に、左衛門から文字を習っているのだが、^⑦専ら優しい言葉で綴られた往来物を書き写すばかりだった。

「あれは『論語』だよ。海の方こうから渡ってきた、ひとの道を説いた書さ」あいの考えている事がわかったのだらう、年子は難しい顔で室内に目をやっ

た。
「蕪かじりの百姓の倅どもに論語など教えても無駄——中須賀の外からはそんな声も聞こえる。けれど学問は、^⑧ここに」

年子はまず、自身の頭に右手を置き、それに、と今度は胸に左の手を置いた。「ここに、宝を築くことになる。この見えない宝が一等大切なんだよ」

あいの知る限り、百姓家の女は手習いへは行かず、田畑へ出れば男並みに働き、仕事を終えれば家の中のことや家族の世話で手一杯。頭にも心にも宝を築く余裕などない。

子供なのでそれを巧く伝えられず、あいは戸惑った顔を伯母に向けるばかりだ。

年子は口を歪めたまま、深く頷いた。

「女は、殊に百姓家に生まれた女は、学問から一番遠いところにいる。けれど、学ぶ機会は与えられずとも、自身の中に宝を築けるのが、中須賀の、殊にこの前之内村の女の強みだよ」

その意味するところが明確にわかったわけではないけれど、年子の台詞はあいの胸に残った。

「糸ができれば、またおいでなさい」

別れ際、年子は懐紙に包んだものをあいの手の中に握らせた。中身が銭だと察して、あいの胸は躍る。君塚の家にとつて、多寡を問わず銭が入ることがどれほどありがたいか、幼いあいにもわかっていた。

丁寧にお辞儀をすると、^⑨ハズむ足取りで来た道を戻る。

俊輔伯父さんはただの百姓ではない、あんなに大きな家に住み、ああして私塾を開いているのだから、きつと沢山の実入りがあるのだ、と小さな懐紙の包みを掌の中に握り締める。途中で振り返ると、年子はまだ道の真ん中に出て、あいのことを見送っていた。

「どうして受け取ったりしたんだい」

板敷に置いた懐紙に目を落とし、コトが怒りを堪えた口調で問うた。

「どうしてって」

あいは涙の溜まった目で母を見やった。

「年子伯母さんが持たせてくれたから……」

コトの背後で、ヨシともとはらはらと成り行きを窺っている。

あいには母の怒りの理由がわからなかった。
この地で農に従事する者は、銭を手に入れることが滅多とない。作物を育て、年貢を納め、残ったもので食い繋ぐ、という図式から外れることは難しい。そこから抜け出すために、中須賀の女は、綿を育てて糸を紡ぎ、どうにか機を手に入れて、木綿の反物を織り上げる。母コトとて、例外ではない。

東金の木綿問屋の手代が、一戸、一戸と回って反物を買集めるのだが、彼からお代を受け取る時、コトは安堵の表情をみせる。田で育てた稲も、畑で育てた雑穀の多くも、あらかた年貢で絡め取られてしまう身。銭が入ることは即ち、一家が生き延びられることでもある。

「お母さんはお前に言っただけで、機織り名人の年子伯母さんにお前の糸を使つてもらえたら嬉しい、と」

娘が紡いだ美しい糸を、そういう形で生かしたいと、母は願ったのだと言う。そんなはずはない、本当はこの銭が欲しいはずなのに、とあいは些かむきになった。

「俊輔伯父さんは製錦堂であれだけの子弟を教えているし、伯母さんも随分と反物を織っていたもの。それくらいもらつても」

「あい」

大きな声で名を呼んで、コトは娘の言葉を遮った。あい、ともう一度その名を呼び、娘の手をぎゅつと握り締める。

「お前、いつからそんなさもしい心ばえになったんだ。第一、お前の眼は節穴かい。年子伯母さんの着るものはどうだった。櫛や簪はどうだった。懐にた

んと銭が入っているような形や暮らしぶりだったのか」

^⑩言われて初めて、あいは年子の姿を思い返して、唇を引き結んだ。

「俊輔さんは、貧しい家の子から束脩を一文たりとも取らないんだよ。前之内は皆が皆、揃って貧しいから、結局、殆ど実入りはないのさ。それどころか、腹を空かせた子弟に食わせるために、年子さんは反物を売った銭を持ち出して

いるくらいだ」

滅多とできることじゃないよ、とコトは首を振った。

母の言葉に、あいはしゅんと^⑪肩を落とす。明日、返しに行く約束をして、漸くあいは許された。

土間の窓から、湿り気を帯びた夜風が忍んでくる。梅雨も近いのだらう、蛙の鳴き声が一層、賑やかになった。その鳴き声に、左衛門とコトの躡が交互に^⑫紛れ込む。

あいは寝付かれず、筵から目だけを出して息を詰めていた。寝返りを打てば少しは気が紛れるだらうが、両隣りで眠るヨシともとに、まだ起きていることを悟られたくなかった。

「姉ちゃん、もう寝たか？」

右側から、ぼそりともとの声がした。

「起きてるよ」

末の妹を慮って、ヨシは低い声で応じる。

「廁に行きたいのかい、もと」

闇の中で頭を振る気配があった。

「あいがもらってきた銭、お母さんは本当に欲しくないんだろうか」

「欲しいに決まってるさ。喉から手が出るほど欲しいに決まってるじゃないか」

ヨシの言葉に、もとは筵を捲って身を起こした。

「だったら素直にもらつておけば良いじゃないか。あの銭はあいにやったんじゃない、お母さんに渡るべき銭だし。それを、どうして返したりするんだよ」

「し、あいが起きるよ」

低い声で言つて、ヨシも闇の中で半身を起こした。

「銭を受け取らないのは、伯父さんとの暮らし向きのこともあるけど、あたしらの……殊に、あいのためだと思うんだ」

自分の名が出たので、あいは身体を強張らせて、長姉の言葉待った。

「あたしの反物が初めて売れた時に、お母さんに言われたんだ。銭つてのは厄介だ、なまじ味を覚えると、もつともつと欲しくなる。それが叶えられないと、性根がさもしくなる、つて。百姓が楽しんで銭の味を覚えて、良いことなんて何もない、つてね」

さもしくならないためには、銭の値打ちを正しく知るよりない。あいはまだ十歳、簡単に銭が手に入る、と思わせたくなかったんだよ、とヨシは話した。

「お母さんは偉いなあ」

もとは太い息を吐いた。

「おらだつて、あいと一緒だ。銭をもらうのに躊躇いはないよ。けど、そんな容易く銭が手に入れば、きつとお母さんの言う通り、勝手に他人の懐勘定したり、あてにしたり、さもしいことを考えるようになつちまうんだろうな」

お母さんは本当に偉いなあ、ともとが繰り返すのを聞いているうち、あいの

耳の奥に、年子の声が蘇つてきた。

——学ぶ機会は与えられずとも、自身の中に宝を築けるのが、前之内村の女の強みだよ

文字を読めず、書けない母。けれど、^⑬母の中には、何より尊い宝がある。そう悟った途端、あいは泣きそうになって、姉たちに気付かれぬように筵の中へと潜った。(出典 高田郁「あい 永遠に在り」)

(注) 往来物：当時使われていた庶民教育の初等教科書。
束脩：入門する時に持参する謝礼。

ヨシ・もと……あいの姉。

① ——の部分⑦・⑧の漢字の読みをひらがなで答え、⑨のカタカナを漢字に直して楷書で書きなさい。

② 「^⑭肩を落とす」と同じような意味を表す慣用表現として最も適当なのは、ア エのうちのどれですか。一つ答えなさい。

ア 眉を寄せる イ 髪を下ろす ウ 頭を垂れる エ 鼻を鳴らす

③ 「『⑦』どうしてつて』……見やった」とありますが、「あい」がこのよう
な反応をしたのはなぜですか。理由を五十文字以内で説明しなさい。

④ 「④言われて……引き結んだ」とありますが、この時の「あい」の心情を
説明したものとして最も適当なのは、ア〜エのうちではどれですか。一つ答
えなさい。

ア 銭を持たせてくれた伯母の優しさに甘えてしまったことで自分の心の弱
さに気付き、情けなく思っている。

イ 伯母の厚意を受けたことで、逆に自分たちの貧しさを思い知らされるこ
とになり、自分の軽率さを後悔している。

ウ 伯母夫婦の貧しい暮らしに気づきながら、自分たち家族のことしか考え
なかつた自分の心の狭さを恥じている。

エ 伯母夫婦の実際の暮らしぶりに気づかず、安易な気持ちで銭を受け取っ
た自分の未熟さを痛感している。

3

(I) 次の文章を読んで、①〜④に答えなさい。(太字になっている箇所は『枕草子』の原文です。)

『枕草子』の(九月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の今朝はやみて)と始
まる段は、一晚中降り続いていた雨がやんで、朝日があざやかに差し出した時
の朝露の風情を、清少納言の筆が独特の感受性でこまやかに描く。

庭の植え込みの露はポタポタとこぼれ落ち、そこを歩けば、びっしより濡れ
てしまうほど。そして、ふと目を上げれば、

透垣の羅文、軒の上などは、掻いたる蜘蛛の巣の毀れ残りたるに雨のか
かりたるが、白き玉をつらぬきたるやうなるこそ、いみじうあはれに、
をかしけれ

〈透垣〉とは、細枝や割り竹を、隙間をおいて並べて作った垣根。〈羅文〉
とは、垣の上部に細い木や竹をひし形に組んで飾りにしたもの。その羅文や軒
の上などに、掻き払われた蜘蛛の巣が破れ残っているのに、雨の滴がかかり、
まるで白い宝玉を貫いたように見えるのは、なんと情趣深く魅力的なのだろう、
と彼女は感動する。

ひし形飾りの間から向こうが透けて見える羅文。普通あまり見上げたりしな
い軒の上。そんな場所にかかる蜘蛛の巣を見つける目。しかも、それは掻き払
われた残りの巣。そこに光る露。どこまでも細部にくぐり入って、見つけよう、
見つけてやるぞ、という目だからこそ、発見できたのだ。

少し日が高くなると、その目は萩の枝の露を見つめる。

萩などのいと重げなるに、露の落つるに枝うち動きて、人も手触れぬに、
ふと上さまへあがりたるも、「いみじうをかし」といひたる言ども、「ひ
との心には④つゆをかしからじ」と思ふこそ、またをかしけれ

昨夜の雨に濡れた萩の枝の、紅紫の小さな蝶形花にも複葉にもびっしりと露
がかかっている。その露がポトリポトリと落ちるたび、枝がかすかに動く。そ

(II) 次の文章は、「世にも美しい数学入門」の一部であり、数学者の藤原正彦氏が小説家の小川洋子氏の質問に答えている場面である。これを読んで、①〜③
に答えなさい。

小川 つまり、数学に対して集中することができるといことは、数学がそれ
だけ魅力を持っているということですね。その魅力が一種、悪魔的でもあ
るために人間が引きずりこまれると逃れられなくなるという感じですか。

藤原 そうですね、純粹数学をやりながら、人類に役に立つかどうかなんて考
えている数学者は、たぶん歴史上、誰もいないと思うんですよ。僕も人類
の幸福なんて、考えたこともないですよ。幸福とか福祉とかね。ただ、数
学は圧倒的に美しいですからね。それにひきこまれて、ズタズタになって
もいらいからいくという。そういうところがありますね。

小川 いま、先生が美しいと⑦言いましたけれど、私も先生の『天才の栄光と
挫折』を拝読してから興味を持つているんな数学の読み物を読みますと、
数学者がしきりに「美しさ」について語っていますよね。それまでは、数
学なんていうのは、無機質で感情のないものを、冷徹な心を持った人が論
理的にやっている学問なんだろうと思ひこんでいたんです。①でも、数学
者に一番必要なものは美意識だって、先生もお書きになっていらつしやい
ましたね。

⑤ 「母の中には、何より尊い宝がある」とありますが、「母の中に」ある

「尊い宝」とはどのようなものですか。それを説明したものとして**適当でな
いもの**は、ア〜エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア 相手のことを推し量ることのできる心の広さ。

イ 私欲にとらわれず、公平さを守り抜く強さ。

ウ 先のことまでも見通して行動できる思慮深さ。

エ 私情に流されず、物事の本質を見定める聡明さ。

⑥ 本文について説明した次の文章の□□に入れるのに適当なことばを、
1・**3**は文章中から抜き出し、**2**は自分で考えて、それぞれ答
えなさい。ただし、**1**については四字とします。

1を学ぶ大切さを日常の出来事を通して知るといふ、少女の成長
が描かれている。読み書きのできない母ではあるが、その母の姿勢から、
主人公「あい」だけでなく、**2**の心にも結果的に**3**こと
になっており、家族のつながり、愛情を感じさせる物語となっている。

して人が手も触れないのに、いきなり、ふつと上へはねあがったりする。「な
んて、すばらしいんでしょう」と言葉にも出す清少納言だが、また、こうも思う。
「こんなこと、ほかの人の心には、ちっともおもしろくはないでしょうね」
人それぞれ、そこがまたおもしろい、と。

重たげにうなだれていた萩の枝は、人が手を添えたわけでもないのに、ある
瞬間、ふつと自分ではねあがる。それは、挫折して心を折っていた人が「いつ
までもこうしてはいられない。さあ、勇気を出そう」と前向きに歩き出す心ざ
まになにか似ていると、彼女は感じたのではないか。私が深読みしているのか
もしれないが、ここを読むたびにいつも、すごい眼力だなあ、と改めて思う。

(出典 清川 妙「心の色 ことばの光——学び直しの古典 式」)

① 「⑦白き玉を……こそ」には歴史的仮名遣いが使われています。抜き出し
て現代仮名遣いに改めなさい。

② 「④つゆをかしからじ」の現代語訳に当たる部分を文章中から抜き出して
答えなさい。

③ 「独特の感受性」について、筆者は清少納言のどのようなところに「独特
の感受性」があると述べていますか。三十五字以内で書きなさい。

④ 『枕草子』を説明したものとして最も適当なのは、ア〜エのうちではどれ
ですか。一つ答えなさい。

ア 自然や世相について、自由な立場で綴った鎌倉時代の随筆である。

イ 一人の男の生涯が、和歌を中心に描かれた平安時代の歌物語である。

ウ 宮中での生活や思いなどを、理的に綴った平安時代の随筆である。

エ 旅を通しての経験が、俳句を交えて書かれた江戸時代の紀行文である。

① 「⑦言いました」の部分は元の文章から書き換えられています。尊敬表現
に書き改めなさい。

② 「④でも」を書き言葉に改めた時に**適当でないもの**は、ア〜エのうちでは
どれですか。一つ答えなさい。

ア ところが イ けれども ウ だけど エ しかし

③ 小川氏のこの場面での発言について説明したものとして最も適当なのは、
ア〜エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア 藤原氏を感心させようと、小説家らしく難解な言葉を多く用いている。

イ 藤原氏のさらなる意見を引き出そうと、自分の体験や意見も含めている。

ウ 藤原氏の発言に賛同する意を表すため、丁寧な言葉遣いを心がけている。

エ 藤原氏の発言を修正するため、数学の魅力について具体的に語っている。

